

第四十二回中央教化研究会議報告

「立正安国」と教化学

田澤元泰

『立正安国論』からみた教化

一、『立正安国論』の特色

- 1、奏進し鎌倉幕府を諫言することに意味がある
- 2、何度も書かれたこと

二、立正安国の課題について

- 1、立正安国の精神と日蓮宗教師の課題
- 2、現代の謗法とは
- 3、社会教化での課題
- 4、教化の知恵を活かす
- 5、未信徒教化のばあい

教化学体系

教化学体系

- 1、「教化」の使われ方（法華経・ご遺文）
- 2、これまでの教化学について
- 3、教化学体系構成
- 4、教化の基本と教化学原論
- 5、教化学理論
- 6、教化学応用論
- 7、まとめとして

A 教化応用理論

B 教化応用実践論

日蓮宗現代宗教研究所所長 田澤 元泰

『立正安国論』からみた教化

本日の第四十二回中央教化研究会議のテーマ「『立正安国』を如何に実現するか——教化学の確立をめざして」を受けて、私の基調報告は、「立正安国と教化学」というタイトルでお話をさせていただきます。先ほどの小松宗務総長のご挨拶にもありましたように、本年は『立正安国論』奏進七五〇年の節目の年であります。これまでの現代宗教研究所の研究そのものも、祖願を如何に具体化し達成するかという、日蓮宗としての大きな課題を常に研究してきたわけでありまして、これから申し上げることも、宗祖の弘教の精神を『立正安国論』を通して見ることが一番大事ではないかということでございます。

教化学という、言葉は新しい言葉ではあるのですが、単なる新しい理論を構築するというのではなくて、法華経、そして宗祖日蓮大聖人の弘教のご精神と、我々との間を如何に埋めるか、という課題にむけて、教化学というものを体系化していく必要があるだろうということを述べさせていただきたいと思います。

まず『立正安国論』をもとに教化のありかた、言いかえれば、我々布教の現場に関わる部分としての特色というものを考えてみたいと思います。

一、『立正安国論』の特色

1、奏進し鎌倉幕府を諫言することに意味がある

まず『立正安国論』の特色について考えてみます。『安国論』には、例えば『観心本尊抄』にみられるような教義というものは殆ど説かれていません。しかし、相手は信徒や檀越ではなく、最明寺入道という、引退はしたものの、実際の鎌倉の権力者でした。論理的に厳格であった宗祖が、幕府を諫言するという時に、何故あんなにも教義の部分

が少ないのか、これは他のご遺文とは別の見方が必要なのではないかと思います。『立正安国論』は、幕府に奏進し、諫言をされたということに重要な意味をもっていたと捉えることができるのではないのでしょうか。宗祖は、ものを論じる時には必ずご自分の教義や思想というものを、段取りをもって示していくのが常であります。『立正安国論』はまさに例外的だといえます。もちろん文中に念仏批判という一面はありますが、念仏批判のために書かれたものではないと思うのです。なぜ当時の世の中が乱れているのか、その根源として国が謗法の国になっている、さらにすんでゆくのではないか、という恐れの代表的な対象として、法然による浄土念仏信仰を批判されたのです。しかし、そうした論を書かれることが目的ではない、むしろ書かれたことよって、更に幕府に諫言をしていくことが目的だったのです。当然それはまともに受け入れられるものではないことは宗祖もご覚悟の上だったと思います。その結果として生ずるであろう迫害をはじめとする、ご自分に関わる危害を予想された上でお出しになったわけです。

宗祖の弘教の出発点ともなるべき意味としての位置付け、これは他の御書ではなかなかみられないだろう、という意味で大きな特色と考えます。基調報告でありますので、詳しく根拠をお出しすることは省略させていただきますが、周知の通り、念仏批判に関しては、この『安国論』をお出しになる前に、既に『守護国家論』で、徹底的にその教義的な内容が示されており、更には、ご自分が何故このように幕府を諫言するのかという、内面的な支えというものについては、佐渡流罪時の『開目抄』にて確認をすることができます。それから、『安国論』の最後の結論部分で述べられている、この世が常に宝土である、だからこそ謗法を止め、仏国土を顕現するのだということ、『観心本尊抄』をはじめいろいろな御書で述べておられます。一般には祖伝の中で宗祖が龍ノ口法難を経て、佐渡流罪にて法華經の色説、いわゆる本化の菩薩の自覚をされた上で、『観心本尊抄』や『開目抄』が示されたという風に捉えておられます。勿論、そのことは事実です。しかし、誤解を恐れず敢えて申し上げます、宗祖の思いというものがそこで初めて自覚されたという捉え方はどうも違うのではないかと、既にこの安国論をお出しになる段階で、内面的には当然そ

れは含まれていたのでないかと思うのです。ただそれが実際に、その通りになっていったという事実、確信というものがあるところで、『開目抄』や『観心本尊抄』などが書かれたのではないかと思えます。少なくとも、佐渡において、初めてお気づきになったということではないだろうと思っています。『安国論』をお出しになる段階で、苦難へのご覚悟があったと思います。そうした意味では、むしろ『開目抄』や『観心本尊抄』は、ご自分の生き方が正しかったという確信のもとで、お弟子や檀越にその意味付けを明確にされるということから書かれたのではないのでしょうか。

2、何度も書かれたこと

もうひとつの特色としまして、『立正安国論』というご自身で命名されたこの御書を、当初幕府に出されたもの以外に何度も書かれていたことがあげられると思います。宗祖はこれを書いて、幕府に奏進され、それきりということではなく、生涯この『安国論』を手もとに置き、また常にお弟子や、或いは檀越に、その都度それをお示しになるというように、まさに弘教の基本とせずとそれを携えておられたのではないかと思われます。

教化学とは、教義的なものを布教の現場に活かしていく「学」であるという大きなテーマを持つものではありませんが、それ以前に教化の一番の原点として、宗祖にとつて『立正安国論』の持つ意味、すなわち弘教の精神そのものを教化の原則として位置付けなくてはならないのではないかと思えます。日頃の布教教化という部分においての大きな指針として捉えていく、それがこの『立正安国論』の教化に関する特色であります。

二、立正安国の課題について

1、立正安国の精神と日蓮宗教師の課題

次に、立正安国の精神と日蓮宗教師の課題であります。我々は日蓮聖人の末弟であり、その上での仲間によって日

蓮宗が構成されています。この宗門というものも視野に入れておいていただきたいと思います。宗祖が『安国論』を幕府にお出しになって諫言をされたということの意義と、今我々が実際に遭遇している社会問題に対する、日蓮宗教師さらには宗門としての対応、それがひとつの大きな課題になろうかと思われれます。そこから生じる重要な問題が、現代における立正安国とは何かということです。これは『立正安国論』について教義的に解釈する教学論ではありません。先ほど申し上げた宗祖の弘教のご精神というものを、現代においてどういう風に受け止めるかと考えれば、いろいろな項目が出てくるものと思います。

例えば、現代に於ける国家と宗教との関係に関する問題、これは現宗研にとって常に重要課題として研究をすすめている問題でもあります。かつて宗祖七〇〇遠忌の記念事業の一つとして、『日蓮宗近代史年表』を現宗研がまとめました。その研究の過程で、多くの課題が残っております。例えば、日蓮主義というものが近現代史に於いていかに社会と関わってきたかといった問題点を含めて、我々が日々社会問題にどう関わっていくか、それは個の問題であると同時に、また宗門という両面があるわけでございますけれども、そうした問題についての扱い方など、まだまだ議論の必要があり、我々としてもこうした課題を常に認識をして、自分の問題として受け止めていくことが重要であると考えております。

2、現代の謗法とは

それから、これも近現代での問題と関連するのですが、現代における謗法というのはいったい何でしょうか。宗祖は『立正安国論』で念仏信仰、特に法然による浄土念仏信仰を批判されました。しかし、だからと言って、浄土念仏信仰を批判することが、現代に『安国論』を受け止めるいき方だということにはならないのではないかと思います。当初申し上げましたように、奏進をされた姿勢から考えれば、現代における謗法というのはいさ少し広い視野と異なった視点から捉える必要がありますでしょう。

現代の人々の宗教観という大きな問題があります。そういうところから、或る意味での弾圧として、社会的に批判をされる、或いは軽視をされ、或いは曲解をされていくといった問題を、現代における謗法としてもっと受け止めていく必要があるのではないかとあります。更にそれに対する我々の関わり方というものも基本姿勢について、本宗だけでなく各方面での取り組みの事例も研究し、実践を積み重ねてゆく必要があるだろうと思います。一人ひとりの問題ということのみならず、宗門という組織の問題であり、宗祖の時代にはなかった日蓮宗というこの教団としての課題であり、教団があつてこそできる可能性について作り上げていくこともあろうかと思えます。教研会議での重要なテーマであります。

また、現代は、宗教間対話というようなことが言われるわけですが、このことと謗法との関係ということも、考えておかねばならない問題であろうと思えます。

私も、現宗研の所長という立場で、全日本仏教会の委員会などにも出ておりますが、浄土宗や真言宗などの他宗の方々と席を並べて、色々議論を致します。それが果たして謗法にならないのだろうか、内面で悩む時もございます。しかしもうひとつ視点を考えました時に、同じ僧侶として、仏教者としての共通の課題に向き合った時には、それは法華経を広めていく上での障害となるものを除くことにつながることもあるのです。

現代における宗教界に対し、或いは皆さんの日頃の寺院・教会・結社等における活動に対し、国の権力といたしまして、行政からの介入の問題があります。それは国のみならず地域にもあると思えます。こうした事につきまして、顧問弁護士長の長谷川先生も、いろいろなところで講演をされておられます。例えば、今回の分科会にもあります、裁判員制度という問題があります。我々宗教者がそれに関わらなければならないということをも自分の問題としてしっかりと受け止める必要があります。さらに公益性の問題もございます。いったい国は何を我々に対して求めているのか、ひとつ間違えれば介入になってしまうでしょう。税法の問題も含めて大いに注意すべき状況であります。我々は

常に国や宗教の自由を規制しようとする権力からの介入というものに対して危機意識を持つておく必要があるだろうと思います。そういう意味での、現代の謗法というものをしっかりと把握しておくことの必要性を申し上げたいわけでありませう。

もうひとつ、民間レベルでの圧力があります。いわゆるマスコミ等による世間の風潮というようなことがあります。それは、宗教界や特に仏教界を軽視する、特殊な例を面白可笑しく扱って、坊さん全てがかくの如くであるように吹聴をしていくなどといったことがみられます。我々は時に応じて、それに対して反論を致しますけれども、決してそれがまともに扱って貰えない場合があります。現宗研でも昨年、某大手新聞社によって誤解を招くようなことを記事にされたという、大変苦しい経験もございました。日蓮宗を大事に扱ってくれてはいたはずなのですが、その受け取り方によっては日蓮宗が脆弱だというような印象を与えかねないような記事が出されました。こういうものもある意味では、社会やマスコミにおける、弾圧とまでは言わないまでも、本来の姿をその通り示していないということによる妨害と見ることもできるのではないのでしょうか。このような事例は他にも沢山あるかと思えます。現代の謗法というもの、我々自身の問題としてそれぞれが受け止めながら、整理し、まとめていく努力を是非していただきたいと思えます。

3、社会教化での課題

今申し上げた幾つかの問題を通して振り返ってみますと、日蓮宗の中でも、戦後いち早く立正平和運動が行われました。これは原水禁運動ということで、当時は社会からも評価され、他教団からも、驚異と尊敬の目で見られました。しかし、時代の変化の中で、そうした運動が形を変えてきております。現在は、立正平和の会を中心に、その活動が継続されております。宗門としても、現在の「立正安国・お題目結縁運動」という形でそれが展開されておりますが、やはりその時代の中で、継続をすることの困難さと、時に応じてそれをいかに変えていくかという課題があります。

社会問題というのは常に相手や状況が変わりますので、十年前、五十年前のことがそのまま、今日、或いは十年後、五十年後に通じるというものではありません。こうした問題を我々は常に認識していなければなりません。

それからもうひとつ、宗門としては寺院・教会・結社が構成要員でありますし、またそれを支えるのは、お檀家やご信徒であるわけであります。そういう檀信徒というものに対する布教教化と、そうではない未信徒を対象とした、まさに社会教化という、この立ち位置の違いも、教化学ということを考えた時にはつきりと整理しておく必要があります。特に社会問題に対応する意義というのはいったい何だろう、何故日蓮宗の教師が、平和問題、環境問題等について、議論をしなくてはならないか、或いはなんらかの活動をしなくてはならないのか、その必要はどこから来るのだろうかといった問題点を、どう捉えていくかが重要になります。

現代の諸問題は臓器移植の問題のように、生命観の大きな変化をとまなうことが往々にしてあります。また日々変化してゆきます。そういう問題に対して我々は、法華経や宗祖のご遺文に答えを求めようとしますが、七五〇年前の祖文を現代にそのまま当て嵌めることが可能なかどうか、もっとその間を埋めていく、ルールと言いましょるか、原則といったものが必要なのではないかと思われまます。

これまでも我々はお互いの知恵を出し合ってきているわけでありまます。それらを体系化していく必要があるのではないか、ということを上げたいと思います。

4、教化の知恵を活かす

それぞれ個人が、それぞれの知恵を用いながら、戦後六十年、布教の現場での教化活動を続けてまいりました。宗門としても行われてまいりました。先人がそれぞれ、その場で努力し苦勞されながら、知恵をお出しになったものがあると思います。それらをまとめ分類する必要があります。それは将来にとって、今の皆さん方の現実の苦勞や知恵を生かしていく重要な資料となります。我々にとっては、おかげさまで宗祖のご遺文が膨大にございますので、もの

を論じる場合は、法華経やご遺文を通して考えてまいります。しかし、この七五〇年の長い歴史の間で、特に宗祖滅後、室町期、戦乱期においての各先師の努力があるわけです。法類や法縁等の元にもなっておられますが、それぞれ有名な歴代の先師先聖がたが、法華経や宗祖のご遺文を通して、何を当時の人々に訴えて、どのような布教をされたのかということ体系化してまとめいく中で、今日の我々が受け継いで来ている法灯というものも含めて、伝統の中にある布教に関する智慧を、我々がどう生かしていくかということが大切なことだと思います。もちろんそうした事の資料や情報は、宗史や宗学史の分野にて蓄積されているとは思いますが、布教に活かすという意味で、当時の人々に何を伝えてきたのかという、布教の現場の目線で、やはり、しっかりと把握していくことから、当時の知恵が、現代の問題に対して法華経や宗祖のご遺文を活かす大きな示唆を与えてくれるものと考えます。

皆様方自身もそれぞれ、法縁と深い関わりをおもちであろうかと思いますが、法縁というものが歴史の中で何を伝えてきたのかということは何らかの形でまとめて、後世に伝えて行かなくてはなりません。それが、法縁意識が薄くなると言われている中で、法灯を守るといふことの責任のひとつではないでしょうか。そういうものを伝えていくといふことは、それにこだわることではないと思います。現在、現宗研でも法縁の調査しておりますが、時代によって違うということが分ければ、それではこれからの時代の中で、先師の苦勞された、或いは悩んだ部分の思いといったものを、我々がそれをどう生かしていくかというところで、また違った展開がはじまるのではないのでしょうか。いづれにしましても、そういうものを、我々が、身近なところで捉えていくということを、研究課題の一つにしたいと思えます。これは日蓮宗の持つ歴史、伝統というものがあつてはじめて言えることであります。新寺建立をされた場合でも、寺の歴史はこれから始まるのであり、将来に向けて、やはりそれを繋いでいくという意味においては、何ら変わるものではないと思います。なんとかその辺りのところを教化学という枠の中で、しっかりと位置付けをしていく必要があるかと思っております。

5、未信徒教化のばあい

次に、檀信徒に対する布教というものは、教義やご遺文をもとに、それを分かりやすく伝えていく、或いは宗祖のご信仰を、直接檀信徒に対して示し感激を与えていくという方法をとっております。しかし、やはり檀家、或いは信徒といえども、社会に生き、生かされているものですから、先ほど申し上げましたようないろいろな社会問題の中で多く悩み苦しんでいます。そこに我々がどう関わっていけるかという、布教の現場において、法華経やご遺文の解説という枠には納まりきれない教化というものが、もうひとつ大きな課題としてあるのではないのでしょうか。恐らく現実には行われていると思うのですが、ただそれが個人の経験のみで、まとまっております。大勢のそうした経験や知恵を、まとめていく必要があるかと思っております。

また、檀信徒以外に対する働きかけも、大変重要な部分であります。皆さんがそれぞれ色々な活動をされている中で、法華経への信仰、宗祖に対する信仰というものを共有していない相手に接する時の布教のありようはどうか、ということも大きな課題としてあります。

近現代における宗門の中でも多くの方々が、それぞれ活躍をされておられます。その経験を個人のものとして終わらせるのではなくて、先ほどと同じように、やはり後世に伝えていくものとしてどこかでまとめて、体系化をしておくという努力が、教化学の確立に向けた重要な要素の一つだと思っております。特に社会に対する働きかけというのは人によってそれぞれ異なります。十人十色、それは勝手だという意見もあるかと思いますが、やはり、どこかで集約をして、まとめていくという努力が求められます。勿論それは現宗研の仕事ではあるのですが、皆さんも共にそうしたことへの作業をしていただきたいと思っております。話しが少しずれましたが、少なくとも日蓮聖人が、『立正安国論』を幕府に奏進されたということから始まる、その弘教のご精神というものを、私たちの布教の現場の問題点として、教化学という言葉の意味を考えながら、敢えて述べさせていただきました。次に教化学の体系

について話をすすめてみたいと思います。

教化学体系

教化学体系

1、「教化」の使われ方（法華経・二遺文）

教化学の体系化ということについてお話いたします。最初に、法華経並びに日蓮聖人のご遺文で、この教化という文字がどう扱われていたのかを少しまとめてみました。

法華経については、岩波文庫上中下三巻にて調べました。まず、釈尊が菩薩を教化する、という表現が大変多く見られました。この他に、寿命品の「常説法教化」とあるように一切衆生を対象とした部分もみられます。

はじめの菩薩に向けての文言は多いんですけども、やはりこれは、恐らくその先の、地涌の菩薩を想定されたうえでの特長だと思います。菩薩というものを取って出されたというのは、そこに確たる信仰を持ち修行をされているという、ハイレベルなものに対する教化という、大きな意味を持っているのかなと考えております。始めから一切衆生を教化するというのではなく、敢えて菩薩というものを対象にしている理由はなにかという、素朴な問題意識から勝手なことを申し上げております。

そこには菩薩は誓願を持っているという特色があります。誓願を持った菩薩に対する、更なる釈尊からの教化というものはなんだろうか、ということですが、

次に、寿命品で常説法教化とありますように、法華経での教化というのは、一切衆生を仏道に入らしめる、悟りの世界に入らしめるということが、釈尊の教化の目的ということであります。

このほかに興味を持つ箇所があります。それは法華經の受記品の、

「仏土を淨めんがためのゆえに、常に仏事を作して衆生を教化せるなり」

という一節です。この一節は宗祖にとつては大変大きな意味を持っていると思います。この世を淨めるという仏国土顕現に繋がるということです。宗祖が『立正安国論』をお書きになったというこの根柢の一つになるのではないかと思います。

次に、日蓮聖人ご遺文については昭和定本の一卷二巻のみではありませんが一応調べてみました。宗祖のご遺文につきましては、教化という語句は法華經に帰依するという意味の、宗祖の布教行為として使われています。宗祖にとつては教化という言葉は布教という行為として捉えられて当然のことでございます。以上のように、釈尊が法華經にて本仏の誓願としての救済に伴う教化という場合、これはお釈尊から我々に対して教化をされるわけです。それと宗祖が法華經・お題目を広められる弘教のご生涯において、それを支えられる意味での法華經の經文をよく引用されます。それとは別に、宗祖がご自分の言葉として教化という言葉をお使いになる場合があります。それは法華經の引用とは違う、宗祖から直接に私たちに発せられるお言葉であります。これは当たり前のことなのですが、それにつきまして、もう少し内容を進めてみたいと思います。

2、これまでの教化学について

昭和五十八年、現代宗教研究所の当時主任をされていた石川教張先生が、教化研究集会において、教化学という言葉を使い、教研会議にて行われてきた教化活動に関する事例、体験を、更にはそこから発生する問題点の解明、そしてその方策など、具体的な成果を集約しつつ、教化の内容を明確にしてこれらの体系化を図るという、教化学の重要性が提示され、更に教研会議の大きな目的として、教化学の体系化があることが提示されました。

更に、その体系化につきまして、五つに大きく分類をされておられます。まとめた形でご紹介します。

一つには、研究という立場において本格的に信行と教化の理論と、その方策を体系的にまとめることが、現宗研の使命である。

二つに、日蓮宗が伝道教団として確立するために、単に行政的な措置を講ずるだけでなく、教化の事例や体験研究を踏まえ、教化の内容と方策をとりまとめて提示していく。教研会議等で行っていることであります。

三つには、安直な形で技法的に教化を考えていくのではなく、信仰的に体験的に磨かれたものを提示し、現場において生かしていく教化内容を、教化学としてまとめる必要がある。つまり、人それぞれ色々な技法があるが、そういう方法論が中心ではなく、もっとそれを通していくということの、基本的な内面的構築を積み重ねてゆくといった意味です。またそれが洗練され、実績を持った多くの経験として、体系化していく、そういう内容をまとめて体系化していくことが大事だということです。

四つには、現代社会の状況に対応できる教化学であります。

五つには、教化学の研究内容は、信行論や教団論だけでなく、寺院や住職が現実に遭遇する問題や、寺院婦人の位置づけなど、また十人おれば十の課題があると言っても過言ではないほど多岐に亘る色々な問題の研究内容を受けて、具体的な研究テーマとして、法華経は全ての人を仏道に導き入らしめる教化を説き、日蓮聖人による社会と人間の救済の教化実践を元に、教化弘通の内容方策を考えれば、ここは既に教化学というものが内包されている。と述べておられます。

3、教化学体系構成

私たちもそういうものを受けとめながら、今日の教研会議等に臨んでいるわけです。もう少しこの辺のところを私なりに、教化学という意味合いから整理をしてみました。この整理によって分かり易くなったかどうかは別としまして、簡単な概略図を参考にさせていただきながらお話しいたします。（概略図参照）

【概略図】

教化学体系について

一、教化原論（教化とは何かから始まる教化学の体系について、その構造等を構築する。構造は次の通り。）

二、教化学理論（教化原論に基づきその内容を構築する。自己認識と誘導認識を提示する。）

ア 自己認識

発心に対する理論構築

イ 誘導認識

発心を伝えるための理論構築

三、教化学応用論（教化学理論をもとに、教化の実際について研究する。）

A、教化応用理論

ア 自己認識

発心に基づく布教方法の構築

イ 誘導認識

発心を伝えるための布教方法の構築

B、教化応用実践論

教化学応用理論を基に、宗門から各教師にいたるまでの布教の現場での経験を収集分類する。

まず、教義というものがごさいます。これは日蓮教学という言葉の前に、法華経、そして日蓮聖人によって示され

た、教えの世界、信仰の世界そのものと思つてよろしいかと思ひます。

それを今の自分の信仰の世界にどのように受け止めていくか、これが教義の現実化です。他人事ではなく、ああ昔はそんな偉人がいたのか、すごいな、ではなく、それを自分としてどう受け止めるのかということが教学となります。日蓮教学というのは、宗祖のみならず、歴代多くの先師や、そういう方々の論も入ります。それをご自分の問題としてどう受け止めるのかということが教学だと思ひます。

しかしこれはあくまでもまだまだ、法華経であり、宗祖のご遺文や先師の各論等の枠内であります、それを実際に今度は布教の現場で、いろいろ変化している社会的な問題にどう対応していくか、どう自分はそれについて述べていくかという努力が、この教化学という、もうひとつのジャンルとして置いておく必要があるんじゃないかと考えるわけであります。ご遺文の現代訳というのは教学の部分として今日までとらえてきました。それは重要なことではあります、それで終わるのではなく、そのご遺文を、現在目の前にいる人に対して、どう説くか、その人の悩みに近づき、どう関わるかということが更に重要であります。ただ、ご遺文でこう書いてあるよということでは済まされない現実もあります。教化学は、教学の現代語訳ではなく、教学を布教に生かすために、現実の問題との間を埋めるものという位置付けだと思ひます。

そういう意味での、教化学というものを想定した上での考え方として、三つの分類をしてみました。けして大それた学問体系を提言するわけではありません。今後教化学というものを体系化していくための、手続き的なものとして受け止めていただければと思ひます。

4、教化の基本と教化学原論

まず、教化学原論というのがあります。これは教化学という学問体系の骨格を位置付けします。次に教化とは何か、という基本的な理論を肉付けしていくという部分、理論の構築を積み重ねていくことです。もうひとつは、先ほど申

し上げました布教の現場、実際に布教をされて、それなりの実績なり、経験から課題が発生します。そうしたものを応用論として分けました。以上の三つであります。特にこの原論というのは、一般的な学問での原論とは異なるのかも知れませんが、敢えて原論という言葉を使って、教化学においては、教化学理論と、教化学応用論と二つあるということを経格として、考え方の方法として示すのが原論だということでもあります。そして中身としては、理論と応用論という大きな二要素で構成するということです。例えば物理学でも理論物理と、応用物理があるのと同じように位置付けしていただければと思います。更にもう少し付け足しをさせていただきます。それは、教化学応用論というのは教化研究会議などでも提起されるように非常に多岐に亘りますので、補足的な意味で、この教化応用論の中に、更に応用していくための、まあ基礎的な法則といったものを作り上げていく部分としての理論があります。それから実際に、こうしたらこうなったという、事例集的なもの、これが実践論として存在致します。つまり応用論の中にもうひとつ、内在しているということでございます。

教化学研究の内容というものは本来、法華経、日蓮聖人の教えというものの中に、既に教化学というものの原形が内包されており、それから私という現実に降ろしてくるための考え方を、概略図にて私なりに示させていただきます。先ほどのご法華経、遺文等の捉え方の部分になるんですが、教化というのは釈尊の場合は、教主の立場として説かれました。そして、法華経への帰依ということ、信仰行為として我々に勧める、それが教化という内容であります。そしてさらに「仏土を浄める」という部分が入っております、我々に法華経を帰依をすることをお勧め、またそれを提示していくという教化であります。結果としてこの世が寂光土であるという世界へと展開されていくわけがあります。宗祖の場合は、そうしたことの説かれている法華経への帰依を勧められておられるのですが、宗祖ご自身が仏弟子として法華経に帰依されているところから始まるわけがあります。更に宗祖の弟子や信者の立場になりますと、そうした宗祖への、帰依というのが生じます。私たちは出家得度ということから始まって、釈尊の弟子とい

う意識に加え、日蓮聖人の弟子という意識があります。これが日蓮宗なのです。その意味においては、もうひとつ帰依の対象というものがあられるわけです。これは大変重要な意味を持っていて、当然なことを敢えて申し上げておりますが、宗祖と異なる信仰的意味合いがあることを明確に位置づける必要があるのです。それが日蓮宗にとっての教化学の体系の基礎というところであります。宗祖の本化地涌の菩薩のご自覚に対する、祖師信仰、これは我々のみならず、多くの檀信徒に対しても、そうした布教の展開がされてきたわけでありまして、こうしたものの受け止め方に基づいて、日蓮宗教化学というものが大変重要なテーマとなっております。宗学が日蓮聖人の教義を信仰的意味で体系化されていく、さらに先師の各論も合わせて、教学という形になっていくと思えます。それに対して教化学というものは、その教義や教学が元ではありますが、教化のための内容や方策を、個人の経験のみに終わらせずに、学問的にまとめゆくことであります。それは十人十色あると思えますが、それをまとめて、分析し、分類もしてゆくことから体系化を図る必要があるのではないのでしょうか。

さらに、宗祖について多少は分かるけども、うちの寺の開山上人や歴代上人は一体何を当時の人々に、どういう布教をしたのかということになるとなかなか分からないのが現状ではないでしょうか。ご本山などお寺によっては書物や文献が整備されていることとは思いますが、宝物として奥にしまったままであることもあるのではないのでしょうか。我々としてはそうした先師のものも、しっかりと受け止めていく。それは宗史や宗学史や日蓮教団史という分野ですが、それを更に今の自分にどう捉えていくかということが大切だという意味で申し上げております。それは私たちが日々、檀信徒や社会に対して、色々と布教教化をされている上での大きな素材になり得るといふことです。現在、皆さんがたが実践し経験されていることが、五十年後、百年後に、大いに役立つことを想定して書き置くなど、常に残していく、また現時点においては、お互いにそれらの情報を共有し、自分だけのものにしなくても大切なことでもあります。そのような事も教化学の中で位置付けしていく必要があるのかと思えます。以前はそれらは本山や法類等に

て行われてきました。あのお経の読み方を聞けば、どここの法類だと分かるくらい脈々と伝わっていました。本山の貫首はそれらをよく把握されて若い弟子や門下に教えておられました。現在は宗門の教育制度のなかで行われていますが、各地域での伝統はやはりそれぞれの本山を中心として伝承されてゆく必要があるのではないのでしょうか。それは同時に、教師育成において、何を教えるかということに関して、歴史と伝統というものの中で、当然培われたものがあるわけです、そういうものも重要ではないかと思われまます。せめてそういう伝統を少しでもお感じの方は、それをしっかりと留めておいて欲しい、また後世の人間がそれを、開けるようにしておいて欲しい、そういう努力はそれが与えられた中でしていただきたいと思います。現宗研としてもしっかりと受け止めて、大きな形へと残していく課題はありますが、まずはそれぞれが、できる範囲で始めていただきたいという意味であります。教研会議も、そういうことを議論し、そういう現場を見てみるとか、或いは情報を交換し合う、それらを常時行うために、教化センターが三百六十五日機能するというのが出てくるのです。

話が少し各論に入りすぎましたが、この原論を元に、いよいよ、教化学理論という部分の内容に少し触れてみたいと思います。

5、教化学理論

法華経・日蓮聖人の教えを現代社会の問題に如何に対応させるか、そのための原則は何か、ということを研究しまとめることが教化学の理論となります。布教をする者にとっての法華経、日蓮聖人とは何か。そして出家の発心が布教の原点であることを、法華経やご遺文をはじめ、教義論などでの基本資料を基に理論構築する。法華経は全ての人を仏道に導き入らしめる教化を説き、日蓮聖人によって示された、社会と人間の救済のため、教化実践を元に、教化弘通の内容の方策を考える。現代社会の状況に対応するための方策を考える。教化の事例、体験研究を踏まえ、教化の内容と方策をとりまとめ、提示していく。理論というひとつの位置付けを、こんな表現でまとめてみました。まず布

教の原点は、信仰に基づく発心であります。これは言うまでもありません。嫌々やっているのでは布教とは言えないわけであります。よく車の営業で例えられますが、営業マンが本当にその車が良いんだと思つて一生懸命に売る、しようがないけど、マニュアルがあるからこれでとりあえず話しておけば、という売り方とは自ずから違うということ。何かの本で読んだことありますが、我々にとつてもそういう意味では、発心が原点となつて布教していく、布教は発心がなければ有り得ないという、これはわれわれが宗祖を仰ぐというところから既に始まつております。そこにおける認識と行為は、大きく二つに分けてみたいと思います。

(ア) 自己認識

それは、法華経、日蓮聖人に対して、素晴らしいと思うこと、他にそれを広めようとするこの二点であります。この二つを分けて捉えていただきたいのです。まずはじめに自己認識という言葉を使わせていただきます。それは、法華経、日蓮聖人に触れて素晴らしいと、思うことです。発心と言つてもいいと思います。自己の内面を高めること、ただこれは常に、それを維持していかなくてはならないことです。昔は素晴らしいと思つたけど、今はもうそうじゃない、なんてことは有り得ない、常に維持していかなければならないことがらです。もつと言えば高めていかなきゃならない。それが、この教化学の、教化という言葉のひとつの持つ要素です。信仰すること、教義を己のものにしようとするのもそこなんです。学問的な論文の検証ではないのです。宗祖に親しむ、宗祖に学ぶというところから、ご遺文に接していく、或いは法華経もそうだと思いますが、その意味においての、自分を高めていく、それを自己認識と呼ばせていただきます。それは現代に生きる多くの方々に対して、説得し納得をさせるための大事な要素なんです。しかし、まだそれは自分の内面でありますけども、大変重要な部分を持つということです。

(イ) 誘導認識

二番目に、自己認識に対する言葉がなかなか見つからなかなので、勝手に誘導認識などという言葉を使わせていただ

きました。実は境界認識なんていう認識学の言葉を使ってもいいんですが、ちょっとわかりにくいので、誘導するという意味で、自己認識に対して誘導認識という言葉を使います。その誘導認識とは、法華経、日蓮聖人に触れて素晴らしいと、他に語ることです。己の信仰を、他に説こうとする、それがまさに教化になるのです。信仰を広める、それは、教義の現代化であり、また、相手や社会に対して、その理解をさせる努力がいついてまいります。これが、布教教化とか、伝道という言葉などといろいろな部分でそれが基本になっています。布教院や声明講習でもそうでしょう、或いは行堂でもそうだと思いますが、そういう中で同時に実は内面を高めるということも課題になっているはずだと思います。当たり前なことなのですが、ちゃんと意識しないと、檀家に向かってご遺文の訳したのを配ってればそれでいいんだ、というような形骸に陥りやすいために、敢えて自己認識というものを常に我々は意識していこうということです。それは自己教化ともいえます。釈尊や宗祖に直参をしていく、この関係を常に維持していく、これは釈尊からの目線であり、宗祖からの目線としてこちらに向けられているという自分の意識であり、教化するのではない、教化されているという意識が大切なのです。そのような状況を両面で見っていくという意味であります。敢えてその辺の必要要素、これを抜きには教化学にはなり得ないということを申し上げたいために、自己認識と誘導認識の二つに分けてみました。それらが、教化学理論という言葉の中で、いくつかの課題として、項目が挙げられるのではないかと思っております。次に教化学応用論について述べてみたいと思います。

6、教化学応用論

次に教化学応用論でありますが、これは安易な意味でテクニク的に教化を考えていくことではなく、教化学理論にて提示した、自己認識と誘導認識の両面から教化を考える、つまり信仰的に、体験的に磨かれたものを提示し、現場において生かしていくための教化内容をまとめることです。ここでの研究内容は、信行論、教団論を始め、住職や寺族や寺庭婦人についての課題を研究し、教師並びに檀信徒の育成、更には社会活動への参加のありかたなど、三六

○度全方位に亘る視野が大切です。日蓮宗の教化とは対象を選びません。その中から、それぞれの課題として捉えることが重要なのです。お前だけを布教しましょう、という限られた布教ではないのです。色々なものを対象として考えます、だからこそ、色々な要素が入ってくるのです。応用論ではそのような要素というものを、分類しなければならぬのです。それを分析して一つの見解をまとめるというのは、かなり難しいことかも知れません。本日の午後から行われる分科会はまさにそのひとつの現れと想っていたければよろしいかと思えます。そこで当初申し上げますように、ちょっと煩雑にはなるんですが、この応用論の中に、理念的な部分と、実践的な部分と敢えて分けてみました。先ほど申し上げました、自己認識或いは誘導認識なんていう言葉を使っているのはこの、応用論の理念的な部分であります。

A 教化応用理論

(ア) 自己認識

自己認識というのは、先ほども申し上げましたように、内面を高める、すなわち教化する者の信頼関係をどう作るかということです。教えは正しいけど、あの僧侶のやっつてることはどうも違うんじゃないか、これでは布教になりません。なるほどあの人は素晴らしいな、というところから、布教というものは始まるはずですよ。教化布教する者の信頼をどう高めるかということです。これはテクニックとして、綺麗な衣装を着けて、化粧してかっこよく見せる、そういう意味ではありません。もっと内面的な、まさに自己認識という内面を高めるといふ部分から始まることでもあります。

もう一つは、社会問題に対する意識、意義とは何かということです。何故日蓮宗のお坊さんが平和問題、環境問題、或いは生命観の問題等々、その日その日と常に出てくる色々な社会問題を、自分にとっての課題、いろいろと選択肢

はあろうかと思えますけども、そういう社会問題に関わらなければいけないのか、関わるとはどういうことなのかというのを、しっかりこちら側が認識をしていく必要があるだろうと思います。この部分の基本的原則をしっかりとってないといけないのではないかと、ということがこの理論構築のひとつであります。

例えば、神戸の大震災があった時、ここにも仲間の方が何人もおられますけども、私の場合は二週間、四週間後にいったんですが、その時にはとにかく大変な現場でありますから、ヘルメットと安全靴と作業服を持って、現地では入手できない自分用の飲料水、まずは自分の身を守れるということでした。ポケットの中には折五条と数珠は持ってゆきましたけど、決してお坊さんらしい格好ではありませんでした。現場へ行って、それこそ大変な中を、地元のお上人から近くの公園を紹介していただき、そこにテントを張りました。現地の状況を教えていただきながら、出来ないながらも救援のお手伝いを行いました。しかし、ある人達から、衣も持って行かない、玄題旗も持って行かないで、それは布教じゃない、と批判されました。実は二度目にゆくときに多少支援を募ったんですが、そんなのは布教じゃないから各自で行うべきだと拒否されたこともありました。今ではまず有り得ないことだと思います。しかしあの当時はそうでした。そこで私は感じたんです。坊さんがこの被災地の中で、居士衣を着て行脚や手甲脚絆で歩いたからって、誰も意味が分からないだろう、むしろ違和感を持つだろう。それよりも、現場に入り大丈夫ですかと言って、壊れた家の一角に小屋を造ったり、壊れた水道管をつないで水が飲めるようにするとか、それこそ全く僧侶とは関係ないことをすることによって、最後に我々が千葉から行った日蓮宗の坊主だとわかった時に、ああそうか、ということとで初めて、私たちの内面というものを見てもらえたらそれで良いではないかということでした。このような事例は現場に行った方々は恐らく多く体験し、ジレンマをお感じになったと思います。ある政党は要領がいいのです。被災地の角々で十五分位ずつ看板を立てて支援物資を配り、それが終わるとまた次へ行くというやりかたをしていました。それにくらべ、我々は汗みどろになって、ゴミだらけになって、その地区のほんの百人かそこらしか対応出来ない、

それでもいいよというで行いました。どちらが効果的かは分かりません。そのような問題意識で行ったのではなくったのです。あの現場を見て、行ってみようという仲間がいたところから始まっています。しかし、そうした多くの方々の経験がもとで、今では日蓮宗にも、そういうボランティアについての制度化もされようとしていますし、今回の分科会のテーマにもなり、みんな共有の認識を持ってきております。これはやはりあの震災からはじまって、全国からみんなそれぞれ青年会、或いは有志の人が、いろんな現場に行きながら、積み上げてきたものと言えます。そういうことを、教化学としてまとめていきたいな、ということでもあります。このような経験を教化学の体系の中に、位置付けされるということ、是非皆様にも認識していただきたいのです。外見上では他の人々と同じことをしていても、それを支える内面は僧侶であり、信仰であることに意味があるのだと思います。社会問題に対する思いというもの、どこから来るのか、それは宗祖であり、法華経だと思えます。そののしつかり後ろから位置付けをすることが、もうひとつ教化学の大きな課題として捉えていくことだと思います。安国論講義の中でもよく言われる、最初の冒頭にみられる宗祖の目線は、多く苦しんでいた人々の目線だ、宗祖はそこから『立正安国論』をお書きになった。その目線は、我々が同じく共有すべき目線であります。これは、教義という言葉には収まらないかも知れませんが、宗祖の生き方の一端を自分のものを持ってこれるひとつの例だと思えます。いま申し上げたのは自己認識を高めていくということのひとつの例でございます。

このことは、教師個人のことだけでなく、宗門全体のことでもあります。社会から信頼され尊敬される教団づくりに繋がる重要なことだと思えます。

(イ) 誘導認識

次に誘導認識です。これは午後の分科会等で話し合われる内容でありますが一応、体系という言葉を使っていますので幾つか思いつくものを項目的に挙げてみました。レジユメには無くて大変恐縮でございますが、お聞きいただけ

ればと思います。まず、教団と檀信徒の関係です。これは先ほどもちょっと触れましたが、信仰を共有している者同士というような意味合いで捉えていただければよいかと思えます。信徒に対して、我々が布教教化するという理由です。教化学ということはその理論的な体系を示す、というのが今回の課題でありますので、何故私は布教をするのかという当たり前のことなのですが、それをしっかりと位置付けようということです。私は千葉県なものですから、檀家と信徒を分けてしまうんです。現在は北関東と千葉教区が分かれています。以前は関東教区がありました。なかなかテーマがあわないもので、北関東と千葉県を分けて教研会議を行うようになりました。なぜかといいますと、北関東の方々は信徒を檀家にしていくにはどうしたらいいだろう。信徒はすぐ気が変わるのでしっかりと捉まえるにはといった問題提起です。ところが、千葉県は日蓮宗の檀家さんが多いのです。千葉県北東部では七里法華なんて呼ばれている、日蓮宗ばかりの地域もあります。大多喜、勝浦方面でも日蓮宗のお檀家ばかりです。ところが、お檀家であつても信者ではない。檀権（檀家の権力）なんて言葉が一時話題になりました。今はそうでもないと思えますが、以前は住職が勝手に境内の庭木一本切つても、寺役員が怒ってきたものです。私の住んでいる茂原の周辺でも、住職を飼っていると言うような時代もありました。あるお寺の手伝いに行つて檀家さん相手に話をする、檀家のお布施で寺は生活しているんだと、はつきり言われたことがあつて驚きました。こうした事情の違いにより、教研会議での問題意識が分かれていました。そうしたことから、檀家の教化という項目も必要だと思えます。何故私は信仰のあるはずの檀家を教化をしていくんだ、その何故の部分をしっかりしておかなければいけないと思えます。

未信徒の場合、もっと広い社会的な教化という課題があります。社会教化事業というのがありますけども、組織とこの中でなく我々自身が、社会に向けてどのような教化をしていくか、という項目もあるかと思えます。この課題は必要に応じてもっと明確にしておかなければいけないと思えます。何故私は未信徒である貴方を教化するのか、それぞれ我々の中に位置付けをして、分類して、使い分けていかなければいけないと思えます。その部分が一般的に共

通認識の上で、私のやりかたはこうだけど、ということになります。それらが経験として積み重ねていった時に、社会といってもいろいろなジャンルがありますが、それぞれの経験がひとつの大きな、共通の知恵として積み上がったものを残していこうということが、誘導認識という言葉をとおして課題として構築してゆくことが必要だと思います。また違った意味では本山等を中心とした、我々の布教の形態、そこには法縁法脈などといったいろいろな要素があるろうかと思いますが、大きく言えば教団の歴史そのものからみた問題意識を明確にしてゆくことも重要になるかと思えます。現宗研でも法縁については教団論として扱っておりますけれども、それは組織論であり、更にそれを利用していくために、組織でなければできない幾つかの問題点、それが教育の部分、法器育成の部分であったりするわけがあります。

さらにもうひとつ大事なことは、社会という言葉の中には時には大きな権力者であったりする場合があります。これはやはり、一個人の布教とは自ずから形態も変わってくるでしょう。関わり方のノウハウも違うはずであります。そうしたことも、経験をしていく中から積み上げていく、それがこの教化学の中に大きな課題として実を結んでいく要素ではないかと思っております。特に今は国や政治の世界も大きく変わろうとしております。また、マスコミ等による無責任な報道などもあります。そうした社会に対して、我々がこれからの布教に関しても常に確認をしながら、時には発言をしていかなければならない、そんな局面も十分に考えられます。そうした場面では個だけでは無理であります。日蓮宗という大きな教団として考えなければいけない要素があります。寺院教会結社の布教活動と運営というものをどう守るか、中央のみならず地域も含めて、宗務院、宗務所或いは教化センターというような活動母体が、それぞれ持つ問題意識の中から教化研究会議等にて問題提起をすることも重要になってくると思われれます。そこから教団が大きな力を持ち、防波堤にもなる、或いはバックアップをする、そういうような要素が教団のもつ大きな意義だろう、ということも誘導認識という中の、一つの項目として存在させたいと思えます。

B 教化応用実践論

次に、今のはあくまでも理念的な部分であります。実践としてどうなんだろうか、ということをし少し申し上げます。布教の現場というものは既に申し上げてますけども、実際に皆さんが教義をもとしながら、現代社会に向けてそれぞれ布教されてる、そういう経験、また経験に基づく知恵というものをまとめていきたいというのがこの実践論の部分であります。理念的な部分で位置付けて、実際にはこうやったらこうなった、ということが実践論の部分となります。ここには普遍的な結論というものはありません。皆様自身の経験というものを出し合い一つの可能性を見つける。あるいは失敗例から問題点を提示する。しかもそれは刻々内容が変化する事柄が多いのです。十年前の事例はもう通じないといった事も含まれます。それらを理念的な分野へと戻して、ある段階で教化学の重要項目にまで影響してゆくのです。今回の分科会の中で、布教の現場からの経験や提言を出し合っていたことが、教化学の応用論の実践部分ということの大きな素材となっておりま。よろしくご協力をお願いしたいと思います。

日蓮宗現代宗教学研究所規程というのがあります。現宗研は教化学の体系化を確立していこうというのが課題であります。ただこれは私や主任、或いは所員やスタッフだけで行うものではない、むしろこの教研会議がその情報を求め、研究を進めていく大きな核であります。エンジンであります。中央教研のみならず、各教区或いは管区で行われる教研そのものも同じ位置付けであります。それらの集大成として、現宗研が最終的には教化学の体系という中で位置付けされていくんだということを、ご理解ご認識をしていただきたいと思ひます。

分科会につきましては、既に今日の資料の中に、問題提起者がそれぞれお書き頂いてますので、どうか午後の分科会では私が申し上げた幾つかの課題の中で、ご参考になるものは利用していただきながら、問題提起に従って、ご提言をいただければありがたいと思っております。

7、まとめとして

最後にまとめとして結ばさせていただきます。今日の日蓮宗やその教師への課題は、多くの社会問題に対して如何に対応したらよいか、そのための基本的な姿勢を、宗祖が『立正安国論』を幕府に奏進され諫言をされた、弘教のお姿とそこが精神から学び取ることが重要であるといえます。安国論御勘由來に「但偏に国の為法の為人の為にして身の為に之を申さず」とされた宗祖日蓮聖人の、ご生涯にわたるご精神に基づけば、私たちは宗門の興隆や、寺院教会結社等の繁栄のために布教するのではないことは明確であります。ひとえに、悩み苦しむ多くの人々のためであり、その結果として法華経が弘まる、お題目を唱える人々が増え、寺院教会結社それぞれが繁栄をし、延いては宗門が興隆をするということ、念頭に置いて布教していくべきであります。夢多き僧侶がお寺の法灯を受け継ぐ入寺式などで、來賓の多くがご祝辞を述べられますが、「みなさん宗門興隆のため、当山繁栄のために頑張っていたきたい」と述べられます。勿論それは間違いではありません。結果はそうなんです。ただ若い者にはその手前が必要なんです。「どうか多くの人々の悩みを少しでもなくすために頑張ってくれ。世界安穩のために、出来ることで良いから、やってくれ、それによって寺の繁栄、宗門の興隆があるのだ」と激励してほしいと思います。特にこれから担っていく若い者たちには、そういう意味での、我々日蓮宗の僧侶としての大きな役目の位置付けを、もっと明確にしておいてあげなければいけないと思います。少なくとも現宗研が、教化学体系の中で、今日申し上げたことが、一番の基本テーマとして将来に繋いでいく大きな基軸になっていくんではないかと考えます。そのためにも、『立正安国論』をお出しになった宗祖のご精神というものから、教化学を学んでいくことが一番の根幹になっていくのだらうと思っております。以上をもちまして、今回の基調報告の責めを終わらせていただきます。ご清聴ありがとうございました。